

AICHI  
PREFECTURAL  
MUSEUM  
OF  
ART

MEMBERSHIP

愛知県美術館友の会・会報 第23号

# 空中回廊

この企画展は文化交流 [ペルシャ文明展 煌めく7000年の至宝] / 会員のひろば / 講座ダイジェスト / 愛知県美術館コレクションから 一深く知ると、もっとみえてくる [ワイエス家訪問記] / トピックス / 友の会活動紹介



○この企画展は文化交流○

# ペルシャ文明展 きら 煌めく7000年の至宝

2006年10月13日（金）から12月10日（日）まで開催

## 遠くて近い国、イラン

「近年ペルシャ文明が世界的な注目を集めています。昨年には大英博物館で大規模な企画展が開かれたほか、オーストリア、ドイツでも相次いで展覧会が開催されてきました」（朝日新聞社、ペルシャ文明展公式ホームページより）。そのペルシャ文明をこの秋、愛知県美術館で目の当たりにすることができます。しかも今回は、日本では約50年ぶりという本格的な展覧会となり、はるか7000年前にまでもさかのぼるペルシャ文明を一望するまたとない機会となります。

イラン高原を中心とする地域では、古くから独自の文明が育まれていました。紀元前3000年紀には、メソポタミア文明と交わりながら勢力を強めたといえます。このメソポタミア文明との交わりは、ペルシャ文明にとって非常に大きな意味を持つものでした。沃土と川水に恵まれたメソポタミア（特に南部＝バビロニア）は、農耕と牧畜が発達し、食料・衣料といった農産

物こそ豊富であったものの、石材・木材・金属・貴金属・宝石・貴石などの物資は皆無に等しく、遠隔地からの輸入に頼らざるをえませんでした。他方、東方に隣接するイラン高原は、メソポタミアが欲しがるこれらの物資の相当部分を供給していましたが、世界有数の乾燥地帯として知られ、農耕には適さず常にかんばつや飢饉に悩まされていました。東京国立博物館上席研究員の後藤健さんは、隣接しながらも全く自然環境の異なる2つの地域、メソポタミアとイラン高原、この両者間のやり取りが、人類最古の文明が誕生するもとになったのではないかと述べています。

時代は下り、紀元前550年にはイラン南西部のアケメネス朝ペルシャがオリエント地方を平定します。これは、史上初の世界帝国の誕生となります。西はエジプト、東はインドに広がる巨大帝国には金銀製品が集まり、都の一つで現在世界遺産に指定されているペルセポリスに建ち並んだ宮殿は、豪壮な彫刻と写実的な浮彫で飾られました。



《こぶ牛型土器》前1500—前800年 イラン国立博物館蔵

ペルシャは東西文明の中間に位置し、文化の中継地として大きな役割を果たしたといえます。アケメネス朝の下で帝国内の諸民族が交じり合うと、後の3世紀に再び広大な領土を得たササン朝ペルシャの時代には、シルクロードを通じガラスや銀製品を輸出します。ササン朝のガラス製品に似た作品が東大寺の正倉院にも伝わることから、日本文化へのペルシャの影響も指摘されています。つまり、日本からは飛行機で10時間少々を要する遠い国イラン（古名ペルシャ）も、文化の奥底では日本と深い関わりをもつてつながっているといえるのです。



《有翼ライオンの黄金のリュトン》 アケメネス朝  
イラン国立博物館蔵

#### ..... 展覧会の見どころ .....

ペルシャ文明展では、先史時代から7世紀に滅びたササン朝に至る輝かしいペルシャ文明の歴史が、イラン国立博物館のコレクションを中心とする約200点の逸品で紹介されます。最大の見どころは、史上初の世界帝国アケメネス朝ペルシャの栄華を示す出品物です。とりわけ、高貴な人物のものと考えられる《黄金のリュトン》は、2005年に大英博物館で公開されて注目を集めました。皆さんも、今回の展覧会のポスターで一度はご覧になったのではないのでしょうか。あれを使ってワインを飲んだら…、さぞかしおいしそうですね。他にも碗や短剣など美しい装飾がほどこされた金製品も見ものです。先にも挙げた後藤健さんは、アケメネス朝の美術について次のように述べています。「遠隔地産の材料と多国籍的な工人たちを巧みに使い分けて、アケメネス朝の宮廷美術というものは作り上げられたのだが、その特徴を一言で述べれば、「完成された様式の美」ということになる。作られた作品に個性やほとぼしる生命の表現はなく、それ以上でもそれ以下でもない、完成された様式の美がある」。つまり、ペルシャ文明の魅力の一つは、

多様な文化をうまく統合させて、一つの荘厳な文化に作り上げたところにあるのかもしれませんが。ペルシャ文明展は多岐にわたる宝物や生活の道具を見て、当時の風や匂いを感じられる展覧会となりそうです。

#### ..... 今、「ペルシャ文明展」を行うことの意義 .....

我らが愛知県美術館の学芸員、高橋秀治さんは今回の展覧会開催にあたり、作品の確認のためイランを訪れたそうです。日本で耳にする現在のイランには、核開発問題や、テロ支援国家とアメリカから名指しされるように、残念ながらあまりよい印象はありません。高橋さんもその不安を抱えながらの訪問だったそうですが、現地では、アメリカ経由で入るニュースの印象とは大きく異なり、平和な庶民の暮らしと、ペルシャ時代からの文化を大切にしている文化関係者の努力などを目にする事で、大きく印象が変わったそうです。高橋さんによると、古くはシルクロードを通じて東西の文化交流があった日本とイランですが、アメリカべつりの今の日本において、ペルシャ文明を紹介する意味は、多様な文化を知り、お互いの存在の価値を認め合うことにつながるのではないかということです。

※記事は本展覧会を担当された高橋主任学芸員へのインタビューをもとに構成しました。（文責：湯田）



ペルセポリスの遺跡（撮影：高橋）

○会員のひろば○

## ワークショップ / 邦楽を鑑賞する会 友の会事業活動

◎「愛知曼陀羅」展関連ワークショップ『日光写真を撮ってみよう!』

7月15日に、愛知県美術館で初めての写真展「東松照明展」の開催にちなんで、友の会の主催によるワークショップ「日光写真を撮ってみよう!」を行いました。友の会でワークショップを企画することも初めてのことでした。準備をしていくうちに「日光写真だけじゃなくってピンホールカメラもやりたいね。」「ピンホールカメラの模型をつくってのぞいてもらおうよ。」ということ

になって、内容がどんどん広がっていききました。段ボール箱や空き缶を使ってピンホールカメラを作ったり、露光時間を何度も確かめたりしながら、楽しく準備を進めました。昔懐かしい日光写真を

イメージしながら、できるだけ楽しく取り組めるように工夫しました。募集を始めた頃はほとんど応募がなかったのですが、徐々に増えて子ども、保護者合わせて50名近くという盛況ぶりでした。

当日は天気もよく、ピンホールカメラの模型をのぞいては「見えた! さかさまに写ってる!」と驚きの声を上げ、お母さんも「私にも見せて。」と交代でのぞいていました。また、市販のピンホールカメラを使って写真も撮ってみました。シャッター音もなく、写っているのか半信半疑

の様子でした。

日光写真では、自分たちで描いた「たね絵」を感光紙に重ねて、色が変わるのをじっと見つめている姿が印象的でした。感光紙の上に、葉っぱや貝殻・アクセサリなどをのせる「フォトグラム (マン・レイはレイヨグラムと命名)」という技法もやってみようということになり、3才の幼い子どもから付き添いの大人まで楽しく

行うことができました。いよいよ、アイロンでの「現像」。みんなが注目する中、感光紙に青色がサーッとついていくたびに「わーっ」と声があがりました。今回のワークショップをやってよかった

なと思った瞬間でした。実物の影が映った作品は新鮮だったようです。できた作品を台紙にセットして満足げな子どもたち。

日光写真は家庭でもできるので「感光紙をあと2枚差し上げます」と言ったら保護者の方も大喜びでした。盛りだくさんの内容でしたが、子どもたちの楽しそうな笑顔のおかげで暑さや疲れも飛んでいってしまいました。

(鑑賞教育担当理事 小林克敏)



◎「江戸絵画展」関連イベント『邦楽を鑑賞する会』

「木村定三コレクションの江戸絵画—小世界を愉しむ—」に因んで、友の会では邦楽を鑑賞する会を催しました。出演者は杵屋喜多六派五世家元はじめ、杵屋喜尚、杵屋喜之香、杵屋喜美哉のお三方、それに南山大学教授安田文吉先生にご出演いただきました。



私たちは普段直接邦楽を見聞きすることは殆どありません。緋毛氈に正座された紋付姿の出

演者の皆さんが大変美しく、三味線の音色が会場に響きました。演目は「鳥羽絵」と「藤娘」、詳しい解説もいただき、今まで知らなかった邦楽の世界を体感しました。安田文吉先生には、



江戸の文化や演目についての詳しい解説をお願いし、邦楽の世界を少し身近に感じることができたのでは、と思います。杵屋喜多六師からは、実際に三味線の演奏についても解説していただきました。江戸の粋な芸能を体感し、展覧会で観る「江戸絵画」にも、どこかで長唄の音色を重ねることができたのかもしれない。

(友の会会長 宮崎玲子)

◎友の会事業活動紹介（イベント担当）

皆さんは友の会のコンサートや懇親会に出られたことがありますか？それらの企画・運営するのがイベント担当理事の役割です。友の会ではこれまで様々なイベントを行ってきました。他の美術館の友の会では、会員の交流はあまりないのが普通です。しかし、県美友の会では、近年特にこのようなイベントを通じて、会員同士の交流に力を入れています。

昨年5月にはアジアの潜在力展にあわせて「ガムラン音楽会」を開催し、立ち見も出る盛況でしたにはゴッホ展で展示された作品にちなみ、美術



館前中庭で生演奏を聴きながら食事ができる「夜のカフェテラス」を4回開催し、毎回ほぼ満席で、立ち見が出る回もありました。10月の鑑賞会後には懇親会を催しました（写真）。

今年に入って4月には「邦楽鑑賞会」を行いました。安田文吉南山大学教授による解説で、三味線の杵屋喜多六師の長唄「鳥羽絵」「藤娘」を鑑賞しました。8月には昨年好評だった「夜のカフェテラス」を「ナイトカフェ」と改称して開催しました。

今後は、11月23日にペルシャ文明展にあわせてペルシャ起源の楽器「サントール」の演奏会を催します。1月にも懇親会とコンサートがあります。

これからもこのような行事を続けて行きたいと思えます。会員同士や学芸員との交流を図って、美術館と友の会の発展の一助となるように努めていますので、ご意見ご要望がございましたら遠慮なくお寄せ下さい。

(イベント担当理事 佐久間・森)

## 友の会連続講座

# 「ルネサンス美術を読む～3大名作をめぐる」

5月から6月にかけて、愛知県立芸術大学教授、森田義之氏を講師にお迎えし、16世紀初頭イタリアのルネサンス最盛期に3人の天才が制作した名作を取り上げ、連続講座を開催しました。

### 第1回 レオナルド・ダ・ヴィンチ《モナ・リザ》

《モナ・リザ》は多くの謎に包まれている。最大の謎はモデル。モナ・リザ＝(伊)Monna Lisa＝リ



ザ婦人。描かれた女性はおそらく人間的に素晴らしく魅力的な女性だろう。同性愛者のレオナルドが、これ

程女性に対して心を開いた作品は他にない。母のように優しく包み込むような寛大な心で画家を見つめている。

最初にモデルを特定したのはヴァザーリで、フィレンツェの市民フランチェスコ・デル・ジョコンドの妻、エリザベッタ(愛称がリザ)とした。その他には、ジュリアーノ・デ・メディチの愛人、マントヴァ公妃イザベラ・デステ、レオナルドの愛弟子サライの女装姿、レオナルドの自画像などあげれば切りがない。私の説はジョコンド夫人に戻る。その根拠は、夫妻の家系図・夫の遺言書を徹底的に調べ上げ、ジョコンド夫人が素晴らしい人格者だったことを明らかにした近年の新しい研究でも裏づけされ、自説にさらに確信を持った。ただ、モデルの確定は《モナ・リザ》の謎を解く第一段階にしかすぎない。

### 第2回 ミケランジェロ《ダヴィデ》

《ダヴィデ》はルネサンス彫刻の最高傑作であるが、美しいだけでなく非常に奥が深い。この4.1mの巨像は、重心を片方の脚において片方を休ませるコントラポスト(休め)のポーズをとっている。しかしよく観察すると、古典的均整がとれた全身の中でも頭と手が異様に大きく誇張されている。右手は血管

が浮き上がり極限まで力がこめられ、頭部に向かってエネルギーが上昇・凝縮し、恐ろしいほどの強烈な視線・暴力的顔つきとなって現れている。

ミケランジェロは、政治的危機状況にあった都市国家フィレンツェの「力」の象徴としてこの《ダヴィデ》を制作した。一方で、あらゆる人々が目にする公共的空間に全裸の巨像を表現したことは、彼が潜在的に持つ男性の肉体に対する深い愛着と独特の美意識が深く関わっている。私は、政治的市民としての情熱と、個人的な男性肉体に対する感覚が微妙にミックスされ、この傑作が完成したと考えている。

### 第3回 ジョルジョーネ《嵐》

《嵐》はルネサンス絵画史上、最も主題解釈の難しい作品。ジョルジョーネの描く人物は、寡黙で動きがなく、それぞれを関連づけるものがない。《嵐》は様々な男女の物語に当てはめることができ、しかも特定できない。現在、物語的主题(古代神話、旧約聖書、聖人伝)、寓意的主题、無主题など、20以上の仮説が挙げられているが、どれも確証を得るに



ジョルジョーネ 《嵐》  
1505-1507年頃

は至っていない。

私は、無主题ではなく主题を意図的に隠したと考えている。当時この作品を鑑賞する機会があったのは、パトロンとその周辺に限られた人々だけ。主题をパト

ロンと画家のみで共有し、第三者には自由に連想をさせて知的ゲームを楽しんだのではないか。

いずれにしても、主题の論議とは離れて、この作品は独自のポエジーとファンタジーの魅力にあふれている。だからこそ、我々は《嵐》の物語的主题を際限なく想像するのだろう。(文責：水野)

○愛知県美術館コレクションから一深く知ると、もっとみえてくる○

## ワイエス家訪問記



暖冬であった気候が一変して米国東海岸で記録的な積雪（ニューヨークでなんと70cm!）を記録した日、私はペンシルヴェニア州チャッツ・フォードにいた。今回の旅の目的のひとつでもあるこの地のブランディワイン・リヴァー美術館も日曜日であったが大雪のために臨時休館となっていた。私はこの美術館内にあるワイエス・オフィス（ワイエス家のコレクションを管理するための学芸員であり、ワイエス夫妻の秘書でもあるメアリ・ランダ氏の執務室）でランダ氏とこの美術館での次の展示のことなどを話しながら、その時が来るのを待っていた。それは画家ワイエスとの7年ぶりの対面である。

時が来て私たちは雪道を車で彼の自宅へと向かった。辺りは前日からの大雪で一面の雪野原となりブランディワイン川のほとりに建つワイエス家は、まさに彼が描く世界そのもののように見えた。自宅は母屋とゲストハウス、そして彼の絵にたびたび登場する粉引き小屋からなっている。

母屋の前に着いた私たちは車を降り、玄関に立つと扉は開かれ、そこには笑顔のワイエス夫妻の姿があった。画家は年のせいか以前会ったときよりいくらか小さくなったように感じられたが、夫人は変わらずしっかりとした印象であった。母屋はこの画家の名声に比べれば質素であるが、手入れの行き届いた品のある雰囲気を感じられる。玄関に入るとすぐ

に火の燃える暖炉のある部屋で、そこが応接でありダイニングルームでもある。使い込まれた椅子とテーブルや食器棚などから昔からの生活を大切にしていることが一目でわかった。壁には最新作のネイティブ・アメリカンの父子を描いたテンペラ画が掛けられていた。88歳というこの画家の年齢からは想像できないほどしっかりと描きこまれた作品であった。子供の視線はまっすぐこちらに向けられ、見る者の心が覗き込まれるような感じを受けるものだった。

夫妻は私が着ていたジャケットのデザインと色をひどく気に入って話が弾み、私をモデルに描いてもよいという冗談？も出るくらいであった。夫妻とランダ氏と私の四人でテーブルを囲み、自家製のりんごジュースをいただきながら話をした。話題はもっぱらアトランタで開催中の回顧展と日本に渡った作品、そして日本人がワイエスの作品に何を見ているかということであった。

結局予定を大幅に超え、一時間以上過ぎて退去し、翌日にはアトランタのハイ・ミュージアムで開かれていたワイエス展に向かったのだったが、この面談があとで思わぬサプライズに結びつくとは予想さえ出来なかった。そのサプライズとは、帰国後ランダ氏から、「作家夫妻がワイエス自身の作品を高橋のいる愛知県美術館へ寄贈する気があるが受け取るか？」という信じられないメールが飛び込んできたのである。（主任学芸員 高橋秀治）

※今回アンドリュー・ワイエスご夫妻より寄贈頂いた作品《氷塊I》を、本会報表紙に掲載しました。

### ■学芸員の横顔

高橋秀治（たかはし・しゅうじ）  
愛知県美術館企画普及課主任学芸員  
岐阜県生れ。岐阜県美術館の開館準備に参画。その後愛知県に移り、愛知県美術館の開館準備にも参画。主に作品収集を担当。開館後は「アンドリュー・ワイエス展」「アメリカン・ドリームの世紀展」「国吉康雄展」などを担当する一方、教育普及活動や友の会なども担当。趣味はスキー、料理。





AICHI  
PREFECTURAL  
MUSEUM  
OF  
ART

# MEMBERSHIP

## 美術館から

### 公開シンポジウム

「作品をまもり、伝える美術館 - ある仏画(木村定三コレクション)の修復をめぐる」

愛知県美術館は、友の会の御協力を得て、11月4日に公開シンポジウムを開催する予定です。

美術作品を長く鑑賞できる状態で将来まで伝えることは、美術館の重要な役割です。このシンポジウムの中心となる内容は、木村定三コレクションの中から、ある未公開の仏画1点を取り上げ、美術史、修理技術などという、修復の際には欠かせない判断を行う各分野の専門家をお招きし、作品の修復方針とそれにまつわる諸問題について論じる場という、一般にはあまり触れる機会のない場面を公開しようというものです。全体のプログラムを通じて、作品をまもり、伝えるという、展覧会場だけからは見えてこない美術館の重要な役割について、日頃、学芸員がどのような取り組みを行っているのかについて、垣間見ていただければ幸いです。

主任学芸員(保存担当) 長屋菜津子

## 友の会活動紹介

### 江戸絵画展

- 4月 現代作家自作を語る 桑山忠明
- 4月 他館鑑賞会 愛知県陶磁資料館
- 4月 邦楽鑑賞会 長唄 ★
- 5月 講座 アンドリュウ・ワイエス ☆
- 5月 総会

### 愛知曼陀羅展

- 5・6月 連続講座 イタリアルネサンス(全3回) ★
- 6月 特別鑑賞会(昼・夜)
- 7月 ワークショップ 日光写真を撮ってみよう ★
- 7月 他館鑑賞会 岐阜県美術館 ☆

### 愉しき家展

- 8月 特別鑑賞会(昼・夜)
- 8月 ナイトカフェ運営(全4回) ☆
- 9月 講演会 人間国宝の世界一陶芸を中心として
- 9月 講演会 彫刻家若林奮を巡って

### 定例活動

- 小物製作 のべ10回
- 彫刻の枕・座布団・ひも・彫刻カバー
- 木村コレクションの風呂敷補修手入れ
- 発送 のべ8回
- 受付 のべ20回
- アンケート集計 1回
- 会報発行 第23号発行
- ホームページ 随時更新
- 鑑賞学習交流会 のべ3回

★中面で紹介 ☆裏面で紹介



◎他館鑑賞会：岐阜県美術館◎・▶  
三県立美術館協同企画展第2弾を鑑賞。「岐阜県美ルドンコレクションの優品60点を中心」と山本学芸員が話されたように、確かに見応え十分でした。



### ◎会員限定講座◎

講座「アンドリュウ・ワイエス」では、「氷塊I」にまつわる高橋学芸員の意外なお話や現地写真等に、画家をより身近に感じて会員も笑顔で納得の様子でした。



### ◎ナイトカフェ◎

昨年好評だったナイトカフェを今年も開催しました。今年は友の会会員がレジ、配膳をサポートしたことで、昨年よりもお値打ちに生演奏を楽しむことができました。

## これからの企画展のご案内

### ペルシャ文明展

10月13日(金) → 12月10日(日)

### ルソーの見た夢/ルソーに見る夢

12月20日(水) → 2007年2月12日(月・振替)

### 所蔵作品展 若き日の美術家たち

2007年2月23日(金) → 4月1日(日)

## お知らせ

5月27日早朝インドネシア・ジャワ島中部を襲った地震で、「アジアの潜在力」展に出展していただいたアリ・ウマールさんの自宅も壊滅してしまいました。現地でコーディネーターをされた広田さんとメールで交信していた学芸員の高橋さんからお話を聞き、友の会が少しでもお役に立てればと6月開催した友の会事業の会場に募金箱を設置しました。皆様の暖かいご協力で44,606円を支援活動をしている広田さんに送付いたしました。(事務局)

## 編集後記

名古屋で最高気温37℃を記録する猛暑の中、23号の編集は続きました。見て楽しい紙面作りを心がけており、毎号できるだけ多くの写真を掲載しています。その中の数々のナイスショットは会員の小林さん撮影によるものです。(平松)

□編集 水野 愛子/平松 章子/森 健次/伊奈 由希子  
湯田 文/折戸 祥子/中田 賢/真野 良子(事務局)  
□協力 愛知県美術館企画普及課  
□発行 2006年9月  
愛知県美術館友の会  
〒461-8525 名古屋市東区東桜一丁目13-2  
愛知芸術文化センター内  
TEL: 052-971-5511 (代) 内線 347  
FAX: 052-971-5604  
E-mail: tomonokai@aac.pref.aichi.jp  
美術館 HP: http://www-art.aac.pref.aichi.jp